

近代日本のユートピア思想と愛国主義

井上円了『星界想遊記』を読む

岡田正彦

okada masahiko

ユートピア的意識とは、まわりの「存在」と一致していない意識である。

どういう意味で一致していないかといえば、いつもそういう意識は、この現実のなかではまだ実現されていないような要素にのっとって、体験や思考や行動の方向づけを決めているからである。

—— マンハイム『イデオロギーとユートピア』

○ 井上円了と『星界想遊記』

明治二二年（一八八九）の年末、伊豆修善寺の温泉宿に宿泊していた井上円了は、夜更けに思索をめぐらすうちに星界を旅行し、異世界を巡るといふ奇妙な体験をする。遙か彼方の星界へ旅立った円了（想像子）は、理想の世界を求めて次々と異星を巡り、異世界の文化や風俗、社会のシステムに触れて再びこの世界へ帰ってくる。

翌年、円了はこの想像上の旅の記録を一冊にまとめ、『星界想遊記』と題して刊行した。哲学書院から出版された、このユニークな書物については、これを明治期の「SF的奇想小説」の先駆的作品として位置づける横田順彌氏の紹介や、康有為の『大同書』との影響関係を指摘した坂出祥伸氏の論文など、その意義を強調するエッ

セイや論文がすでに発表されている(1)。

とくに坂出氏の論文は、西洋近代の学問や思考法を使って中国の伝統思想を再構築し、政治的には清末の戊戌変法運動の指導者となった康有為と井上円了——とりわけ『星界想遊記』——の関係を残された文献にもとづいて実証し、日本と中国の近代化に共通する思想的背景を浮き彫りにした貴重な論考である。とくに、井上円了と康有為の出会いの痕跡を実証的に明らかにしたことには、画期的な意義がある(2)。

横田氏のエッセイは、時代に先駆けて日本に心理学を紹介し、妖怪学のような独創的な学問体系を構築した円了の経歴に、さらにユニークな一頁を加えるものである。また、坂出氏の論文は、井上円了の思想的影響力を日本国内にとどまらず、より広くとらえる可能性を与えてくれる。しかし、井上円了の生涯や近代日本の思想状況に『星界想遊記』を位置づけ、本書の意義について考察した論考はこれまでほとんど見られない。

『星界想遊記』の冒頭において、円了は想像上の星界旅行の始まりを次のように述べている。

想像子(井上円了) 一日飄然として京華を去り、遠く山間の僻邑に遊ぶ。たまたま客舎にありて余夕を送らんとす。その翌朝はすなわち、我人の数年来渴望したる明治二十三年なり。想像子、ここに於いて往を思い來を卜するに、無量の思想心頭に集まり、感慨おのずから禁ずるあたわず(3)

このあと、精神を集中した円了は「瞬時にして遠く蒼々茫茫たる天界の中に遊ぶ」という想像上の体験をする。もちろん、こうした状況説明や体験をそのまま事実として鵜呑みにすることはできない。とはいえ、井上円了の生涯にとつて明治二三年は、明治二二年から明治二二年まで、一年間に及ぶ欧米視察旅行から帰国した円了

が、『日本政教論』や『欧米各国政教日記』といった著作を刊行し、ようやく軌道に乗ってきた「哲学館」（後の東洋大学、明治二〇年設立）の運営方針を定めて、その生涯における積極的な社会活動や啓蒙活動の基盤を確立した時期にあたる。もちろん、同時期における憲法の制定と議会開設の気運の高揚も意識していただろう。ここで円了が強調している「我人の数年来渴望したる明治二十三年」という表現は、あながち誇張とは言えないのではなからうか。

また、哲学館の拡張や妖怪学の体系化、哲学堂の建設・運営や修身教会運動の展開といった、その後の多彩な啓蒙活動と本書の内容を重ね合わせてみると、円了の星界旅行は単なる妄想ではなく、将来の方向性を決定するような重要な思索の足跡であることが明らかになるだろう。

本稿では、「想像子（＝円了）」とともに星界旅行の足跡をたどりながら、井上円了の宗教・哲学・政治意識の特質を探るツールの一つとしてこのテキストを読み解き、円了の生涯を貫く思想の特質について考えていきたい。

一、星界に遊ぶ —— 理想の世界を求めて ——

修善寺の温泉から星界へ旅立った円了が、最初に訪問するのは「共和界」である。この「星界」では、「純然たる男女共和独立」が確立され、男女の「同等同権」が実現されている。

この星界では、男女はそれぞれ一人が一家を成し、子供は出産の直後から「育児院」において養育される。公益と各自の職分こそが至上の価値とされており、その徹底的な社会の合理化の帰結として、夫婦や家族や親族といった私的な紐帯は完全に解体し、法を順守することのみが人々の価値基準を支えている。

このような世界では、人々は血縁や地縁のしがらみからは完全に解放されるだろう。しかし、「政府をもって社会を代表するものとし、これを我人の父母とし、また我人の子孫とし、我人は固くその命令を守るべき義務を有する」社会では、「その法律はかえって厳にしかつ煩」となる。純然たる共和国には、自由よりはむしろ圧政があることに失望した円了は、「政府もなく法律もなき純然たる自由国」を求めて共和界をあとにする(4)。

次に、想像子が訪れるのは「商法界」である。この星界には、いかなる政体も存在しない。全ては経済的価値によって決定され、法律も税を納める義務もない。社会生活上のトラブルを解決するのは、法律や政治的介入ではなくて「決運器」と呼ばれるある種の古い器であつて、個人的なトラブルから国政上の問題に至るまで、あらゆる対応が天運天命によって決定されている。

「共和政体」の意思決定は、結局は「多数の論」をとるに過ぎない。「天運天命をもって社会の政府、法律とする」方が、むしろ信頼できるのだ。しかし、全てを経済的価値と命運に委ねる世界には政府の圧政は存在しない一方で、「世の進歩の極み、ここに至る」とされる世界はあまりに味気ない。

余政府なき国に遊はんことを望むや久し。今その国に遊ぶ。これ、余が幸いなりといえども、その社会の礼節、風習にいたりては、人情を去ること遠し。これ余が永住すべき地にあらず。(5)

またしても失望した円了は、次の星界へ向かう。

三番目の星界は、「女子界」である。この星界では、女性は「女尊子」と呼ばれ、女尊男卑の社会が実現されている。最高位の「総老」から「諸校の教員、医士、会社の事務員、戸主、戸長にいたるまで」政治や経済、官

吏の主要なポストはすべて女性が独占し、「一般に無学無知」とされる男性は、「生産工業」などの「筋力」を必要とする仕事に従事する。男性に比べて「脳力」の優る女性が社会の中核にあることは当然であり、この格差は「知力」に優る女性と「体力」に優る男性という、男女の性差の帰結であるとする通説が社会に蔓延している。しかし、想像子は次のような見解を鵜呑みにすることはできない。

貴国もし開国以来、政教の全権を女子に委するの習慣を用いたらんには、その国勢、今日に十倍してさかんなるに至るべし。しかるに、女子をして男子の下に立たしめたるは、ひとり女子一人の不幸のみならず、貴国一般の不幸なり。(6)

この星界もまた、円了の理想とはかけ離れた世界であった。

次の「老人界」は、究極の長寿世界である。この星界には四季の移り変わりは存在しない。時間の尺度は昼夜の交代による「日」だけである。この星界では、人々は一般に三十万日を超える長寿を楽しんでいる。これを年数に換算すれば、八百歳を超える。

長寿の国を求めていた想像子は歓喜するが、この世界では全ての価値は長幼の序によって決定され、これを覆すことはできない。最高齢の長老が、社会の最高位に就くのだ。

老人界の人は言う。

帝王は全国人民中の長寿第一なれば、四十万日以上なれども、そのほかはみな四十万日以下なり(中略) 古来

の帝王中、長寿の冠たるもの五十一万七千五百三十三日、すなわち一千四百十八年なり。(7)

たとえ、同年同月同日に生まれた者であっても、何時何分まで出生の時間は記録されており、少しでも長く生きている者が上席に着く。このため、人々は「摂生養生の術」を尽くして長寿を得ようと奔走する。この序列にもとづく制度の拘束は厳しく、「今日国家の平穩無事なるは、全く圧束抑制の功力なり。圧政も政治上には実に必要のものならずや」と論じて憚らない。

想像子は、老人の圧政を嫌って他の星界へ向かう。

次に訪れる「理学界」は、科学が非常に発達した星界である。この世界の人々は、頭部が大きく身体は小さい。政府の代わりに学校制度が完備し、「政治教育一致」主義がとられている。全ての学校は「理学科」のみを有し、問題の解決や意思決定は、常に「学理」にもとづいてなされる。

ここには政治的抑圧も不合理な社会問題も存在しない。「理学」の発達によって、生活の快適さや人々の健康は完全に保証されている。

想像子は、これこそ理想の世界であると感嘆の声をあげる。しかし、テクノロジーの発達によって「昼夜寒暖」はすでに存在せず、不治の病も存在しないこの世界では、人々は睡眠をとることも毎日食事をすることもない。「一生無眠の世界」を駆け抜けていく人々の平均寿命は、三十年に満たない。

それでも、その人生は決して短いものではない。なぜなら、科学の進歩によって不眠不休で暮らす生活が可能になっているため、睡眠や食事といった雑事からこの世界の住人たちは解放されているからである。この世界の人々の寿命は決して長くはないが、無駄をそぎ落とした人生の「一生涯働作」の時間は、人生のほとんどの時間

を無駄に費やす我々の世界の住人の働作時間よりは遙かに長い。

この星界の住民はいう。

わが国は二十七年半の定寿なれども、その間眠息なく病臥なく、ただ百日に一回食事をとるのみ（中略）ゆえに知るべし。この国の人寿は貴国の五倍なることを。いづくんぞこれを短寿といて斥するを得んや。（8）

想像子は、その論理に感嘆しつつも物理学界をあとにする。

二：旅路の果てに —— 精神性の向上と理想世界 ——

結局、どこにも完全な理想世界を発見できなかった想像子は、さらに「不死国」を探すうちに帰るべき道を見失い、一人の「仙土」に出会う。

仙…「汝、なんのためにために、この無限の限、無涯の涯の間に来たりしや。」

想…「余、不死国を探らんがためにここに來たれるなり。」

仙…「不死国はすなわちこの天界なり、不死人はすなわちわれなり。」

想…「これ天空なり、国土にあらず。いづくんぞこれを不死国というを得んや。」

仙…「不死国は一定の国土なく一定の方位なく、上下にわたりて際涯なく、古今を貫きて窮極なく、宇宙をもつて国とし、万界をもつて家とし、空間をもつて礎とし、時間をもつて柱とし、方位なきをもつて方位と

し、国土なきをもつて国土とす。(9)

この形体なき精神世界には、一定の方向なく、政府なく、法律なく、財産なく、教育制度なく、老少男女の別なく、昼夜、寒暖、眠食もない。この世界は「肉眼」ではとらえられず、「心眼」によってしか見ることはできないのだ。

この無形の天界が「哲学界」である。この星界は、有形世界の相対的歡樂(仮樂)を超越した、絶対的歡樂(真樂)が実現した世界なのである。

円了は、この仙士との問答をくり返すうちに、なぜ自分が理想の世界に到達できなかったのかを悟る。

ああ、この界は余は久しく祈願して来生せんと欲せし世界なり。ああ、この土は余が長く渴望して永住せんと欲せし国土なり。しかして、余が今日までその目的を達することあたわざりしは、有形界のほかに無形界あることを知らず、相対的歡樂のほかに絶対的歡樂あることを知らざりしによる。

相対的理想を求めるかぎり、決して絶対的理想世界に行き着くことはできない。「有形界」の歡樂は「相対的歡樂」であり、「無形界」における「不苦不楽」の「絶対的歡樂」とは質的に異なる。有形界の理想には、必ず限界がともなうのだ。

共和界にてはいまだ政府の圧制を免れず、商法界にてはいまだ運命の圧制を免れず、女子界にては女子の圧制

あり、老人界にては老人の圧制あり、理学界にては学者の圧制あり。

どの星界にも、絶対の自由の境地は実現されていない。さらには、各界それぞれに各々の「苦」がある。

共和界も商法界も女子界も老人界も理学界も、あるいは刑罰の苦あり、あるいは貧賤の苦あり、あるいは衣服の苦あり、あるいは妻子の苦あり、あるいは病患の苦あり、あるいは生死の苦あり。これ、なんぞ歡樂の界ならんや。(10)

円了は、この相対的歡樂も相対的苦も超越した「不苦不楽」の絶対的歡樂の世界に、永住することを望む。しかし、仙士は「有形界の義務」を全うするまでは、この世界に住まうことはできないという。

有形界の義務とは、次のようなものだ。

上に政府あれば政府に対する義務あり、君主あれば君主に対する義務あり、内に父母あれば父母に対する義務あり、妻子あれば妻子に対する義務あり、朋友あれば朋友の義務あり、社会あれば社会の義務あり、国家の義務あり、祖先の義務あり、万物の義務あり、天地の義務あり、自己の身体に対する義務あり。(11)

これらの義務を全うしたうえで、はじめてこの絶対的歡樂の世界に住まうことができる。

このように語った仙士は、自分は「釈迦牟尼」であると告げる。さらに、その傍らには三聖人があって、それ

それに孔子、ソクラテス、カントであることを明かす。

釈迦は言う。

実に汝の世界は苦界なり。しかれども、その苦は即ち楽界に達する道なり。請う、汝記せよ、苦は楽岸に達する船なることを。(12)

これら「四聖」の言葉に感激した円了は、「速やかに本土に帰りて人生の義務を全うし、再びこの界に来たるべし」と誓って、現実の世界へ帰還する。

「苦界」の諸問題の相対的解決は、たとえその極限に至っても完全なものではない。一方に偏すれば、必ず他の課題が生じる。有形界の問題に絶対的解決をもたらすことができるのは、絶対的歡樂の世界に触れることによって生じる精神の充足だけなのである。

「共和界」からはじまる円了の星界旅行は、たんに荒唐無稽な夢想ではなく、西洋の近代思想や学問から学んだ知識、さらには海外視察によって見聞した現在進行形の社会変革のイメージを検討したうえで、来るべき世界における精神界（哲学界）の重要性を確信するに至る、円了の思索の旅と考えるべきだろう。

理想の世界の実現は、共和制のような新しい政治体制の確立、女子界や老人界のような文化の変革、理学界におけるような高度の技術革新、さらには商法界に見られるような経済システムの充実といった、相対的な社会変革だけでは完成しない。社会を形成する人々の意識変革と精神の充足こそが、さまざまな社会変革の根底にあつて、来るべき近代国家を支えるのである。

こうした円了の意識の背景には、星界旅行に先立って遂行された最初の世界旅行の経験と、思索よりも実践を重んじる円了の特異な哲学理論がある。

三、我人の渴望したる明治二十三年 —— 近代日本の確立期と井上円了 ——

伊豆修善寺の温泉で、「想像子（＝円了）」の精神が星界を旅する前年の明治二十一年六月九日から、翌二十二年六月二日まで、円了は米欧各国を訪問して、インド・中国を経由して日本に帰るといふ最初の世界旅行を行なっている。一年間を超えるこの旅の記録は、明治二十二年に『欧米各国 政教日記（上・下）』と題して、哲学書院から出版された。上巻が刊行されたのは八月、下巻が刊行されたのは一二月である。まさに円了が、修善寺の温泉で「我人の渴望したる明治二十三年」を待っていた時期であった。

この後、円了は他に二回の世界旅行を行ない、全三回の世界旅行において、世界の文明圏のほとんどを隈なく視察している。毎回、旅行記を出版しているが、この『欧米各国 政教日記』は、欧米各国の宗教・教育・風俗に重きをおいた見聞録であり、「政教子（＝井上円了）」が、その国固有の文化や宗教を紹介する形式をとっている。

円了の大望は、次のようなものだ。

政教子（＝円了）、一日机により新〔聞〕紙を読むに、天下の論峰ようやく進みて政教の版図に入り、舌戦、筆闘、檀上やや穏やかならざる事情あるを見る。立ちて社会の風潮をうかがえば、政海の波、ようやく高く、教天の光のために暗きを覚ゆ。政教子すなわちおもえらく、これ、あに書窓に閑座するときならんや。（中

略)今やわが国、政教の関係ようやく密に、政教の論場ようやくやかましく、まさにその影響を一国独立の上
に及ぼさんとするの勢いあり。政教子ここにおいて、奮然一起して遠洋万里の途に上り、欧米政教の大勢を一
見せんとするに至りしなり(13)。

明治二二年には、大日本帝国憲法が發布(明治二三年施行)され、翌二三年には帝國議會が開設される。さら
には、明治二三年に教育の刷新を求めて「德育涵養の義につき建議」がまとめられ、これを受けて同年「教育勅
語」が成立し、勅語の奉読式を中心にした学校行事や国民の祝日が定着するようになる。こうした社会状況のも
とで、円了は新たな近代国家の「實際哲学」を求めて、欧米各国を歴訪する世界旅行に出発するのである。

明治維新以来、日本の「国家の改良」によって「政府の事業」や「会社の事業」は大いに進歩したが、人々の
風俗、精神氣質、人物人品、徳義、礼節などの改良については、ほとんど進歩が見られない。そこで円了は、欧
米各国固有の「政教 \parallel 實際哲学」を詳しく観察し、日本の将来のあり方を模索する旅を続けるのである。

「政教子」という呼称は、こうした円了の意図を反映したものだ。

政教子曰く、政教すなわち哲学なり。哲学に理論哲学あり、實際哲学あり、政教は實際哲学に属す。理論哲学
の目的は真理を発見するにあるをもって、人外に道を講究せざるべからず。實際哲学の目的は実益を興起する
にあるをもって、人中に道を応用せざるべからず。(14)

サンフランシスコから北米を横断し、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリアなどの風俗、宗

教、教育の実情を自分の目で確認し、肌で感じた円了を感嘆させたのは、各々の国がそれぞれ固有の文化と思想と個性を保持しながら、近代国家の確立を進めていることであつた。

人民みな独立の精神・思想を有するをもつて、各国みな独立の学問あり、独立の事業あり、独立の組織あり、独立の目的あり、独立の風習あり、独立の礼式あり、独立の宗教あり。その独立とはなんぞや。曰く、フランスは事々物々の上にフランス固有の風を存して英国の風に異なり、英国は内外上下の間に英国固有の風を存して米国の風に異なるをいう。(15)

明治二二年六月、この世界一周旅行から帰国した円了は、自ら設立した「哲学館」を改良して、「日本主義の大学」を設立することを目指すようになる。こうした意識は、欧米各国の近代化の成功の背景には各国固有の精神的支柱があり、それが人民の活力の源泉になっていることを円了が、肌身に感じることによつて生じたものであつた。

円了は、明治二二年七月に「哲学館改良ノ目的ニ関シテ意見」を發表。欧米各国を歴訪して感じた「教育改良」の方針について、①日本国固有の學術・宗教を研究することの必要性、②西洋の學術ばかりでなく東洋學を研究することの重要性、③人物人品人徳を養成する教育法の必要性、という三点に絞つて論じている(16)。

さらに八月には、「哲学館将来ノ目的」を公表、一〇月には「哲学館目的ニツイテ」を發表して、自らの教育方針の転換を具現化しようとする。その基本的な姿勢は、次のようなものだ。

西洋今日ノ文明ヲ以テ唯僅ニ政治法律等ノ進歩ニ歸スルアラハ甚シキ誤謬ナリ其文明ハ全ク教育宗教等ヨリ百般ノ技術工芸及ヒ商法等凡百ノ進歩セシ結果ニシテ彼ノ政治法律等ノ如キハ僅ニ其一部分ノミ(中略)此小部分ナル政府ヲ改良セシトテ之ヨリ廣大ナル一國ノ基礎ヲ改良セサレハ素ヨリ真ノ文明ヲ希フ可カラサルハ甚タ觀易キノ理ナリ而シテ此廣大ナル基礎即チ國民全体ノ改良ヲナスハ果シテ何モノナリヤ其教育家宗教家哲學家ナルコト問ハスシテ明カナルヘシ行)

政治や社会のシステムの改良は、社会を根底から変革することにはならない。欧米の近代国家の実情を見聞し、修善寺の温泉で想を練っていた円了が求めていたのは、より根本的な「一國ノ基礎」の改良であった。こうした「國民全体ノ改良」を実現するために、円了の提唱するのが「日本主義の大学」の確立なのである。

しかし、ここでの「日本主義」は、皇國主義的なナショナリズムとは決してイコールではない。東洋大学が発行している『井上円了の教育理念』のなかでも強調されているように、表面の目的である「日本主義」の裏面に、宇宙や学理を探究する「宇宙主義」があることを忘れてはならないだろう¹⁸。「國の本は精神にあり」とし、近代日本の形成を支える精神的支柱を確立することが、円了の「日本主義」の目的であった。

新しい政治体制の確立や文化の変革、技術革新や経済システムの充実といった、円了が「有形上の文明」と呼ぶ領域においては、当時の日本はすでに一定の成果を得ていた(と、円了は判断している)。しかし、近代国家に相應しい「無形上の文明」の確立は、欧米の国々に比して遙かに立ち遅れている(と、円了は感じていた)。日本の近代国家の黎明期に、新たな時代の精神的支柱の在り方を模索していた円了が、伊豆修善寺の温泉で想像上の旅に出入したのは、こうした状況のもとであったのである。

実際に存在するか、あるいは当時の状況において想定可能な文化や社会の革新を極端なたちで誇張し、揶揄・戯画化した「星界」の国々は、欧米各国の実情を自ら見聞した「政教子（＝円了）」が、今度は「想像子（＝円了）」として、これからの国家の方向性を探る思索の旅のなかで遭遇した、近代国家の可能性を具体的に表現した世界でもあった。

そして、夢のような星界の旅路の果てに円了は「哲学界」へ到達し、理想の世界の実現のためには、社会や制度の変革に先立って精神の変革が必要であることを悟るのである。

四、哲学館と哲学堂 —— 啓蒙から修養へ ——

「日本主義の大学」を旨指した哲学館の経営は、明治三二年（一八九九）には、私立学校に認可されていないかった教員免許無試験検定許可の認可を受けるなど、順調に推移しているように見えた。しかし、明治三五年の第二回海外視察中に生じた、いわゆる「哲学館事件」を境にして、円了の啓蒙活動は大きく方向転換することになる。

明治三六年、円了は『修身教会設立旨趣』を刊行して、新たな社会教育・啓蒙活動の構想を披歴し、翌三七年には哲学館大学長に就任する。しかし、結局は精神的な疲労から学校経営を断念。学校教育から身を退いた円了は、独自の社会教育活動に取り組むために、明治三九年以後は、明治三七年に建設した哲学堂に退隠して、修身教会運動と哲学堂の拡張のために全国の巡講をはじめるのである。

哲学堂は、哲学館大学の設立を記念して、釈迦、孔子、ソクラテス、カントを三間四面の小堂に祀る「四聖堂」を建立したことに始まる。「哲学堂」とも称されたこの建物を中心に、円了は「精神修養」のための公園を

整備し、活発な講演活動などから得た資金を投入して設備を拡充。宇宙の神秘と人生の意味を探究する道程を具現化した、ユニークな公園を設立する。

「精神修養的私設公園」として構想されたこの哲学堂公園は、「教育的、倫理的、哲学的精神修養」のために建設され、そこに祀られた聖賢に接することによって、人々に精神の修養を促すテーマパークであった。この哲学堂が、学校教育から社会教育へと方向性を変えた、円了の後半生の啓蒙活動の拠点となる(19)。

学校教育を退いた円了は、明治三十九年に「修身教会要旨」を発表。「国家の実力」を涵養するためには、国民一人ひとりの民力を高める必要があるとして、学校教育の「修身」に加えて、学校以外の修身教育を担う活動の必要性を訴えた。

円了は、伝統的価値観にしばられている当時の家庭や地域社会には、修身教育の役割は期待できないとして、海外視察中に感嘆した、欧米の国力を根底から支えている「教会」の日曜学校などの社会活動に言及して、「学校教育」と「宗教教会」が一致して推進する「修身教会」の全国的な組織化を提言している。

その際、もちろん円了は仏教寺院に大きな期待を寄せて、「出世間道」から「世間教」への転換を訴えているが、必ずしも仏教＝宗教とは定義していない。当時の宗教の状況については、次のように述べている。

我邦の宗教は大に衰へたりと云ふも、未だ廃滅せるにあらず、国内到る処寺院のあらざるなく、僧侶の住せざるなく、現今猶ほ七八万の寺院と十万以上の僧侶ありと云ふ其外に神道教会あり、耶蘇教会あり、此等の寺院教会が毎日曜町村の人民を集めて、修身の講話を為すに至らば、その効力著しかるべき(20)

修身教会の目的にとつては、宗派や宗教の違いはあまり意味を持たない。それよりも大切なのは、宗教活動の在り方である。修身教会は、旧来の宗派や教派の枠組みや伝統的な共同体の範疇を超えた、新たな地域社会の自主的な教化活動として構想されたのであった。

円了が構想していた修身教会の組織は、次のようなものである。

一、修身教会の目的は国民に吾人の平常守るべき諸般の道徳を知らしめ、且つ行はしむるにあり、

一、此教会は各町村人民の協議によりて設立し、其団体の自治によりて管理し、其地方の情況に応じて組織すべし、

一、此教会は毎日曜若くは隔週に開くべし、但し地方の情況によりて冬期は毎週、夏期は一月一回とするも可なり、

一、此教会は寺院若くは適宜の場処に於て之を開き、僧侶教員各出席して講話を為すべし、而して会長には町村長若くは町村中の最も名望あるものを推選し、町村内の僧侶及教員をは皆講師として待遇すべし、(21)

教会の時間は、午前九時〜一時くらい。最初に勅語を奉読し、次に教員の講話、さらには僧侶の教誨といった順序を設け、講話の間には音楽唱歌の時間を設けるといった構想も披歴されている。

各地の修身教会は、それぞれの地域性に応じて独自に組織されるべきであるが、円了は情報を共有するために『修身教会雑誌』（『修身』）を創刊し、全国各地を周遊して趣旨の徹底と活動の拡大を図った。全国各地（台湾や朝鮮半島、樺太といった地域を含む）を限なく巡回し、講演活動を行う円了の巡講は、大正八年に円了が逝去す

る直前まで活発に続けられている。

大正七年の円了自身による概算（『南船北馬集 第一六編』）によれば、明治三九年から大正七年までの一三年間に円了が巡講した地域と聴衆の総計は、次の通りである。

総合計 五十四市、四百八十一郡、二千二百六十一町村、二千九百八十六カ所、五千五百三席、百三十七万八千六百七十五人（聴衆）

円了の全国巡講については、三浦節夫氏が『南船北馬集』などの記録を集計して、詳しい巡講地図や集計表をまとめている。それによれば、平均して一年間の聴衆は一〇万人を超えており、ピーク時には年間一七万人を超えている。巡回地もほぼ全国をカバーしており、巡回日数も多い年には年間二八〇日を超えている²²。

円了の構想した修身教会運動自体は、期待したような組織化の成果は得られなかった。しかし、全国巡講自体は、一個人の活動としては類を見ない大規模な講演活動であったことは間違いない。円了は、講演活動から得た収入（多くは揮毫による）を哲学堂の拡張に費やし、四聖堂を中心とする哲学堂の整備を進めた。

大正元年（一九一二）、円了は「修身教会」を「国民道德普及会」と改称し、雑誌『修身』を廃刊して、「会員を募集せず分会も支部も設けざる」啓蒙活動に方向転換した。「国民道德普及会旨趣及び参考条目」によれば、甲・乙それぞれ二〇ずつの計四〇の演題を例示したうえで、「国民道德普及の旨趣の外に教育、宗教、倫理道德、妖怪談、旅行談、等に関し広く学術上の演説講義の依頼」に応じるとしている²³。

自らの講演活動は一定の成果を収める一方で、各地の修身教会の組織化は進まない現状を省みて、円了は活動

の方向轉換を模索していたのではなからうか。

こうしたなか、大正八年二月『東洋哲学』（第二六編第二号）誌上に掲載され、刊行された最後の論文となつた「哲學上に於ける余の使命」のなかで、円了は哲学堂（道徳山哲学寺）を本山とする「哲学宗」の構想を披歴して、次のように述べている。

哲学の向上門の理論は三千年間の諸家の研究より大本は既に定まつて居る、只枝葉の末理を争ふだけが今日の哲学であるから、我々は其根本を握りさえすれば足れりと思ふ、而して之を握るには諸家の書を涉獵するに及ばず只一卷の小哲学史を通読するのみにて宜い、其上は実行問題を研究するやうにしたい、いよく、実行が出来さへすれば、たとひ其人は未だ学はずといふと雖も、我は之を学びたりといふつもりである、偕て其実行方法に就ては、多年実究の結果として唱念法を考定した²⁴

晩年の円了が、「哲学の通俗化」（教育・著述活動）や「哲学の実行化」（社会教育・講演活動）といった、生涯の啓蒙活動の帰結として構想したのが「哲学宗」であつた。

円了は、「哲学を実行化するときは、必ず一種の宗教となつて現はるゝやうになる之を哲学宗と名けたい」とする。そして、明治三九年からの一三年間に、「全国七分通り」を巡り終えた講演旅行の「残りの三分」を巡つた後に、哲学堂を訪れる人々に哲学宗の「宗意」を説法し、同時に哲学宗のバイブルとなる「教書」を編纂して、全国の同志を集めた「教団」を組織するという、壮大な構想を展開している。

しかし、「哲学宗」のバイブルを編纂し、教団を組織するという円了の構想は、大正八年の講演旅行中に円了

が大連で逝去したために、実現されることはなかった。

こうした円了の晩年の活動もまた、理想の社会の実現のためには「一国ノ基礎」である「国民全体ノ改良」が必要であるとし、人々の精神的な啓蒙を目指した円了のユートピア的な愛国主義に支えられている。円了本人もしばしば指摘していることであるが、前半生の学校経営と後半生の社会教育活動は、円了にとって一貫した「哲学」の実践の場であった。

円了は、星界旅行の果てに立てた四聖との誓いを終生遵守し続けたのである。

五、哲学の実行化と『星界想遊記』

『星界想遊記』のなかで、最後に訪れた「哲学界」において想像子（＝円了）をある種の悟りの境地に導くのは、釈迦、孔子、ソクラテス、カントの四聖であった。

明治一八年に円了は、画工に依頼して四聖の画を作成し、この掛け軸を祀って哲学祭を挙行している（図一）。『星界想遊記』の冒頭に掲げられているのは、この四聖の画なのである。

その後も哲学祭は続けられ、現在でも東京都中野区の哲学堂公園では、毎年一一月の第一土曜日に、円了の遺言に従って「哲学堂祭（哲学祭）」が肅々と挙行されている。この日は、哲学堂に祀られた「四聖」に関する講演が企画され、参加者には甘酒やお茶が振舞われる。また、東洋大学の主な関係者が一堂に会して、四聖堂のなかで「南無絶対無限尊」と唱念する独特な儀式を行なう。

四聖堂の天井の意匠は、「哲学」が探求する「物心」の本源と宇宙の本体を表しており、「宇宙の神髄」から放射する真理の光——実際には、放射状に配置された垂木の列——を仲介するように、ソクラテス・カント・孔



子・釈迦の掲額が天井中央部の四方を囲っている。この不可知の實在（真如・絶対・無限）を探求し続けることが、「向上門の哲学」、すなわち一般的な思想的営為の目的である。しかし、円了は高邁な理想（理想的本尊／向上的本尊）を追い求める哲学の営為の対極に、「南無絶対無限尊」の唱念に代表される「向下門」の哲学、あるいは「哲学の実行化」の必要性を説く。

四聖堂の床の中央には、「實際的本尊」あるいは「向下的本尊」として、「南無絶対無限尊」と刻した石柱（唱念塔）が置かれている。円了によれば、この本尊の役割は次のようなものだ。

余思ふに哲学の極意は、理論上宇宙眞源の實在を究明し、實際上其本体に我心を結託して、人生に樂天の一道を開かしむるに外ならず、此に其体を名けて絶対無限尊といふ、空間を究めて涯なきを絶対とし、時間を尽くして際なきを無限とし、高く時空を超越して而も威徳廣大無量なるを尊とす、之に我心を結託する捷徑は、只一心に南無絶対無限尊と反復唱念するに在り、人一人たび之を唱念するときは、忽ち鬱憂は散じ、苦惱は滅し（中略）真善美の妙光を感得するに至る。

その唱念法には、次の三種がある。

誦唱 〓 声を発して南無絶対無限尊を唱ふ、
默唱 〓 口を塞ぎて南無絶対無限尊を唱ふ、
默念 〓 目を閉じて南無絶対無限尊を念ず、

この唱念法によって心中に「安樂城」を築き、進んで国家社会に献身することが、円了の唱導する「西哲未発の新案・教外別伝の哲学」であつた²⁵。

つまり、哲学・理学の探求した「真理」を人々に啓蒙し、自ら思考する習慣を持たない人々に「哲学」するこ

との意義を伝え、伝統的価値観にしばられた社会を組みかえる——あるいは「近代化」する——ことが、円了に
とつての哲学の実行化だったのである。

こうした円了の理念は、修善寺の温泉を出立した円了が、星界旅行の果てに辿りついた境地でもあった。各星
界において強調される、共和制や経済至上主義、女性の社会進出や長寿社会、科学技術の発展や社会システムの
徹底的な合理化といったイメージは、当時の円了が想定することができた、来るべき社会のイメージと重なるも
のであっただろう。円了は、これらの社会変革のイメージを極限まで誇張し、パロディ化することによって、現
実世界のユートピア化の可能性と限界を示すとともに、新時代における哲学／宗教の重要性を強調しようとした
のである。

現実には未だ実現されていないが、今後の可能性として提示される理想世界。円了は、その知識と経験と想像
力を駆使して、来るべき可能性の世界を描き出す。しかし、具体的すなわち相対的な社会や文化の変革に、すべ
ての理想の実現を委ねることはできない。

一見するとこの考え方は、精神的充足を過度に強調する現状肯定論にも思える。しかし、円了の基本的理念
は、具体的な社会変革の可能性を哲学／宗教の精神世界から切り離すような観念論ではなかった。星界の旅から
帰還した円了は、哲学館の拡張と大学の設立、自らの思想と理念を具現化した哲学堂の建設・運営、全国巡講に
よる啓蒙活動の継続、全国に拠点を置く「修身教会」の組織化と社会教育の実践といった、多彩な活動を通して
「哲学の実行化」を推進する。

異世界への旅によって方向づけられていく円了の思索は、その後の活動の方向性を決定するような、決意表明
としての意味を持っていたのではないだろうか。これには、ほぼ一年をかけてアメリカとヨーロッパ諸国を旅し

た、前年の欧米視察旅行との関連も無視することはできないだろう。

哲学堂に祀られ、哲学祭において祭文を捧げられる「四聖の画」を『星界想遊記』の冒頭に掲載し、四聖への誓いを結語とする本書の構成は、決して無意味な夢想の産物ではないのである。

本稿冒頭のマンハイムの引用文には続きがある。

われわれがユートピア的と呼ぼうとするのは、現実を超越した方向づけのうちでも、とくに、それが行動に移されると、そのつど現存の存在秩序が、部分的もしくは全体的に破壊されるようなものだけである²⁶。

哲学界を究極の理想とする円了の思想は、精神的歓楽を至上のもとすることによって、現状を無批判に肯定する精神主義ではない。既存の社会の具体的な変革を志向するユートピア的思想であった。とくに晩年の円了は、哲学堂の経営や修身教会運動に代表されるように、「哲学宗」の普及によって、人々の内面から社会を根本的に変革しようとするユニークな活動を推進する。円了の提唱する「哲学の実行化」は、新時代の理想的国家の実現を志向するユートピア的な愛国主義と結びついた、極めて現実的な理念だったのである。

「日本主義の大学」の構想にも見られるように、井上円了の愛国主義は、皇国主義的な国家への忠誠心に支えられたナショナリズム（国家主義）とは一線を画するものである。政治的共同体への忠誠心としての愛国心とは区別される、来るべき近代世界——あるいは「ユートピア」としての近代国家——への愛郷心こそが、「護国愛理」を掲げる円了の学校経営や出版活動、さらには、修身教会運動や哲学堂の経営といった社会教育活動を支えていたのではないか。内村鑑三（一八六一—一九三〇）のような人々との比較も射程に入れながら、このような

ユートピア的愛国主義の同時代的な広がりについても考えていく必要があるだろう。

また、円了の描き出す将来の哲学／宗教のイメージや、来るべき世界におけるその役割についての提言は、近代日本の宗教概念の形成を考えるうえでも極めて興味深いものである。この時期に著された多くの宗教論との関連も含めて、今後はさらに研究を深めていきたい。

【注】

(1) 横田順彌氏は、『SFマガジン』（早川書房）誌上で連載していた「近代日本奇想小説史 または、失われたナンジャモンジャをもとめて」（二〇〇二年一月～二〇〇八年七月）のなかで、しばしば円了の『星界想遊記』に言及している（たとえば、二〇〇三年の第四四巻・第三号及び第四号）。この連載は、最近『近代日本奇想小説史』（ピラールプレス、二〇一一年）のタイトルで刊行された。横田氏は自らのエッセイのなかで、『古書通信』第八〇三号（平成八年六月）に載せた自身の論考を評価した、坂出氏の文章にしばしば言及している。

二氏の議論の焦点は、『星界想遊記』をSFとして評価することは可能か、という点と円了が校閲者になった、稲葉昌丸抄訳（スチュワート、テート著）『未来世界論』（哲学書院、明治二八年）と『星界想遊記』の影響関係である。『未来世界論』の内容は、「エーテル説」や「原子説」などの「不可見世界」をめぐる科学理論を紹介しながら、靈魂の不滅や死後の世界についても言及するというものである。THE UNSEEN UNIVERSE or Physical Speculation on Future State（不可見世界論一名未来世ニツキ物理上ノ立論）という原題からも分かるように、『未来世界論』は、未来というよりは死後の魂や見えない世界の存在について言及する内容であり、坂出氏も指摘しているように『星界想遊記』への直接の影響は考えにくい。しかし、円了の妖怪学や靈魂不滅論の議論などには、内容的にもかなり近い部分があり、本書と円了の思想の影響関係については簡単に看過することはできないだろう。

また、帝国議会の開設を前にして、末広重恭『二十三年未来記』（博文堂、明治一九年）や服部誠一『二十三年国会未来記』（仙鶴堂、明治一九年）といった著作が評判を呼んでいた当時の状況を考えると、円了の『星界想遊記』も

単なる妄想ではなく、当時の社会状況を踏まえた未来小説としての側面があることは否定できない。

- (2) 坂出祥伸「井上圓了『星界想遊記』と康有為」『改訂増補 中国近代の思想と科学』朋友書店、二〇〇一年（六一六—六三六頁）。

- (3) 井上円了『井上円了選集 第二四卷』学校法人 東洋大学、二〇〇四年、二六頁。

- (4) 同右書、三一頁。

- (5) 同右書、三七頁。

- (6) 同右書、四二頁。

- (7) 同右書、四四頁。

- (8) 同右書、五五頁。

- (9) 同右書、五六頁。読みやすさを考えて、本文を簡略化して会話のみを引用した。

- (10) 同右書、六〇頁。

- (11) 同右書、六一頁。

- (12) 同右書、六二頁。

- (13) 井上円了『井上円了選集 第二三卷』学校法人 東洋大学、二〇〇三年、二〇頁。

- (14) 同右書、二二頁。

- (15) 同右書、一四四頁。

- (16) 東洋大学創立一〇〇年史編纂委員会編『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』学校法人 東洋大学、一九八八年、一〇〇—一〇二頁。

- (17) 同右書、一一〇頁。

- (18) 高木宏夫・三浦節夫『井上円了の教育理念 歴史はそのつど現在が作る』学校法人 東洋大学、昭和六二年、五九—六一頁。

- (19) 哲学堂と円了の思想については、かつて次のような論文を發表したことがある。岡田正彦「哲学堂散歩——近代日本の科学・哲学・宗教——」『佛教史学研究』第四八卷第二号、佛教史学会、二〇〇六年。詳しくは、こちらを参照

のこと。

(20) 井上円了『修身教会要旨』東洋大学、一九〇六年、六頁。

(21) 同右書、一〇頁。

(22) 井上円了『井上円了選集 第一五卷』学校法人 東洋大学、一九九八年、四九一〜四九九頁。円了自身の「大正七年報告」は、三八六〜三八八頁。

(23) 前掲『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』、四五〜四八頁。

(24) 井上円了「哲學上に於ける余の使命」『東洋哲学』（第二六編第二号）大正八年二月、四〜五頁。

(25) 井上玄一編『哲学堂案内』（大正九年増補改訂版）財団法人哲学堂事務所、一一〜一二頁。同じ内容の文章は、さまざまな所に増補・再録されているが、ここでは『哲学堂案内』から引用した。また、唱念塔の設置時期については『南船北馬集 第一六編』（第一五編まで刊行された『南船北馬集』に続く未完の遺稿）に掲載された「大正七年度報告」のなかに、「哲学堂の経営の方は、硯塚を建て、史垣を設け、四聖堂中に実行の本尊として唱念塔を置き、図書館内に雑誌も閲覧し得る設備をなせり」（前掲『井上円了選集 第一五卷』三八六頁）とある。

(26) 高橋徹編『世界の名著 六八（マンハイム オルテガ）』中央公論新社、一九七九年、三〇九頁。

* 哲学祭、哲学堂、修身教会などについては、円了は同じような文章を多方面に重ねて書き遺している。煩雑さを避けるために、本稿では引用をなるべく『井上円了選集』及び『東洋大学百年史』所収の文献に限定し、表記もこれらに依拠した。『井上円了選集』及び『東洋大学百年史』に未収録の文献についてのみ、原本の表記にしたがっている。